下る、展けたる北方は、吾が故郷を置ける千曲河高原である。嶺を下れば展望皆綠田、一直線の坦道は上田町に通じて、此邊を鹽田平といふ、炎天なれば咽乾く事切なり、田甫の流は汚水にして喫すべからず、一錢五厘の茶代あれば、何れか美しからぬ茶舗に休憩して、湯など得んとて漸くにして路傍一小茶舗を見出す。入りて湯を請へば、老婦ありて吾等を注視し、未だ嘗て入りし事なき異人と思ふてか、吾等に茶を出して家を出てぬ。暫くにして歸り來りて、今求め來たる茶菓子を供さる、運の惡きときは、何處までも目的に反して、かゝる事のなき爲めに、小茶舗を特に選みし、特に選し小茶舗は、却而かゝる心痛を吾等に與へたのである。茶菓は上等で、一錢五厘の茶代を知つて、之れが食はるゝものでなし、幾度か茶器に湯をつがすれば、老婦は供せし菓子をすゝむ、心苦しければ茶の甘き筈はなし。充分茶を喫して咽を潤し、いざ出發とて手早く荷物を背負ひ、余は一錢五厘を茶盆に響かして駈け出した、續て吉田氏も駈り出し、一丁程は氣息をもつがず、一生懸命に走つたので、漸くホット氣息を入るゝと、吉田氏は青くなりて、困つたといふのである、吾は氏が、俄に病氣にても起したではあるまいかと思ふた。病氣ではなかつた、今の茶舗にて、あまりにせき込みし故、吾が兒の如く、寶の如く、大切にして、平素肌身を離さず、坐右を離さず愛して居つた、自然木のパイプを、今の茶舗に忘却して來たのである。捨てる事は出來ず、さりとて取りに行くも何となくきまり惡しく、されど大切の愛品であるから、取りに戻つたのである、其の時の氏の顏は、未だ余が頭に印象されて居る。この日の徒歩十六里、午後五時上田町に着、友の家に一泊して翌日自家に歸る、出發のときに咲き亂れたる牡若は枯果てゝ、白百合の咲きて濃厚なる香を吐て居つた。（完）

削りなす岩は茂をのぞきけり
風もたぬ葉柳は瀞に沈みけり
將軍の笑みし樣なり夏の山
河沿ひの道にこぼるやれむの花
風雅なり馬背にれむをおりてゆく
谷越して駒鳥の啼きけり離れ山

* * * *

みづゑ第十四要目

平湯嶺の森林（水彩畫石版）……丸山晩霞
飛驒の旅〔上〕寫生旅行……同
波多松林より望みたる梓川（鉛筆畫寫眞版）……同
白骨溫泉附近の森林（鉛筆畫寫眞版）……同
平湯嶺より見たる大觀（水彩畫石版）……同
高平川の上流（鉛筆畫寫眞版）……同
船津町旅舍の先景（ポンチ畫寫眞版）……同
其他數項